

古道を探る方法

平 田 信 芳（古代交通研究会員）

1 律令期の大隅国・薩摩国の官衙・官道について

奈良・平安時代、大隅国・薩摩国にあった官衙・官道の遺構については断片的に知られているにすぎない。考古学のメスが入ったのは薩摩国府¹⁾・薩摩国分寺²⁾・薩摩国分寺瓦窯跡³⁾・大隅国分寺⁴⁾・大隅国分寺瓦窯跡⁵⁾ だけである。郡家遺構にしても大隅国8郡・薩摩国13郡の中で、郡家関係の遺構と知らずに発掘した結果、調査担当者の個人的見解で薩摩郡家・阿多郡家・揖宿郡家と結び付くのではないかとの情報が漏れて来る状態である。

官道については、延喜式卷二十八兵部省にある下記の記事が基本であるが、確実に判明したのは、

大隅国駅馬 蒲生・大水、各五疋。

薩摩国駅馬 市来・英祢・網津・田後・櫟野・高来、各五疋。

伝馬 市来・英祢・網津・田後、各五疋。

蒲生駅から大隅国府に向かう官道の一部についてだけである。この発見に至る経緯を知っているのは筆者だけであるので、そのことをまず紹介しておきたい。1993年2月、木下良氏（古代交通研究会長）が木本雅康・中村太一（当時國學院大學、院生）両君・橋村修君（國學院大學、学生）を引率して、九州各国の官道調査をされた。薩摩国・大隅国調査の際は筆者も同行した（2月27日～28日）。その時に始良町船津で大隅国駅路の痕跡とみられる地割を確認した。平成4年(1992)～平成11年(1999)、鹿児島県教育委員会は文化庁の補助事業として、歴史の道調査および歴史の道整備活用推進事業総合計画を実施した。筆者は調査委員の一人であったので、平成5年度歴史の道調査報告書⁶⁾ に始良町船津にある大隅国駅路の痕跡とみられる地割の写真を掲載した。この報告書にもとづいて平成13年末に始良町教育委員会が発掘調査を行い、道路遺構を確認したとみられる。調査担当者からの平成14年年賀状で「船津の道路遺構を確認しました。現場は埋め戻しました」とのことを知った。詳細は始良町教育委員会の発掘調査報告を待つ以外にないが、大隅国・薩摩国で駅路遺構が明らかになった最初の場所である。これを起点として周辺に調査が広がることが期待できる。まずそのことを慶びたい。

西海道諸国の駅路想定図は、鹿児島県の場合いろんな概説書・歴史地図のどれを見ても文字通り各種各様である。市来駅⁷⁾・田後駅・高来駅・大水駅の所在地をつき止めなければ、問題は解決しない。県立埋蔵文化財センターをはじめ市町村教育委員会に多くの埋蔵文化財担当職員が配置されているが、積極的に駅家や官道を追求する姿勢は感じ取れない。官道を抑えることは、郡・郷の中心を探る捷径である。歴史地理学・歴史考古学の基本から入って行くことが着実な探查方法と考える。

2 古道を探る方法

古代・中世・近世各時代の道は、現在ではすべて古道になった。道路そのものはどのような時代であっても、政治的要地や経済的要地を結ぶものである。その視点に立つと、道路は古代・中世・近世を通じて大きく変わるものではない。古代の道（駅路・伝路）は「すべて国府に通じる」とみ

なしてよい。中世の道は古代の道を踏襲したものであり、軍事的要衝には必ず山城が築かれ、守護大名・戦国大名の居城・居館が交通路の結節点になっていたと考えるべきである。近世の道は元禄絵図・天保絵図・伊能測量図なども現存しているので、本稿では取り上げない。古代の道を探る方法についてのみ意見を述べる。

（１）注目すべき史料

1029年（長元２） 平季基等が大隅国府・守館・官舎・民烟・藤原良孝宅を焼き払う（小右記）

1132年（天承２） 往古の大路、宮坂の麓の石躰に八幡の御名顕現す（石清水文書）

1177年（治承１） 島津庄……とかみ・けしきの森……正八幡宮……（長門本平家物語）

1197年（建久８） 帖佐郡371丁、蒲生院119丁……加治木郷121丁7反……（建久図田帳）

日本史上最大の荘園となった島津庄の開発者平季基が、1029年に大隅国府を焼き討ちしている。この時の大隅国府がどこであったか、都城盆地から大隅国に攻め込んだ道はどの道であったかは将来考えなければならない素材である。また藤原良孝宅が焼かれているが、春日神社の存在が藤原氏の拠点を探る手がかりになると考える。江戸時代、各郷に総廟（惣廟・鎮守神・総鎮守・総鎮・宗廟・宗社ともいう）が置かれているが、春日神社を総廟とするのは加治木郷だけであり、加治木と藤原氏の結び付きが深かったことを示している。今後の検討材料になろう。

石清水文書に見える「往古の大路、宮坂」という1132年の史料は、大隅国から肥後国・日向国へと北上する駅路が12世紀前半には「往古大路」と呼ばれる存在になっていたことを示す。隼人町にある石躰神社の前に「宮坂橋」が現存している。

長門本平家物語に見える1177年俊寛らが流されて来る道の記事がある。俊寛配流の道は大隅国・日向国を結ぶ駅路とみる見方もあるが⁸⁾、バイパスの一つと考えたい。

1197年の大隅国図田帳記載の桑原郡各郷の田数を見ると、帖佐が最大であり、しかも帖佐郡と記されているので、桑原郡家は帖佐にあった可能性が大である。蒲生駅・桑原郡家・藤原良孝宅探しを大隅国駅路と併行させることも必要だろう。

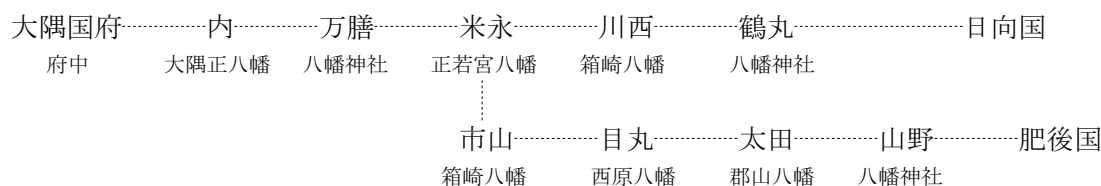
（２）八幡社の分布から考える —— 歴史地理学的方法（その１）

西海道諸国の一之宮を列举すると、次のようになる。筑前（宮崎八幡・住吉大社）、筑後（高良大社）、豊前（宇佐八幡）、豊後（杵原八幡）、肥前（千栗八幡）、肥後（阿蘇神社）、日向（都濃神社）、薩摩（枚聞神社）、大隅（鹿児島神宮：大隅正八幡）、壱岐（天手長男神社）、対馬（海神社）。これらを見ると、八幡社が多いことに気付く。八幡信仰は宇佐八幡に始まり、9世紀になると国分寺の鎮守神として勧請されて国分八幡と呼ばれるようになる。西海道諸国すべてについて眺めていないので言及は出来ないが、大隅国・薩摩国の場合は大隅国府（大隅正八幡）・薩摩国府（新田八幡）・蒲生駅（蒲生八幡）・出水郡家（箱崎八幡）・鹿児島郡家（荒田八幡）などが八幡社と結びついており、郡家・駅家など官衙の所在地に八幡神が勧請された所が多いと見当をつけることが出来る。

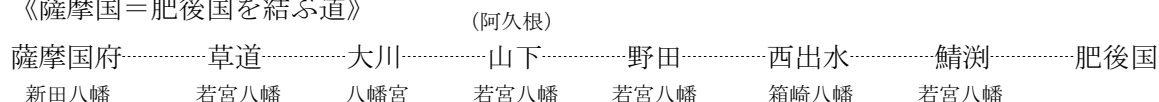
《薩摩国＝大隅国を結ぶ道》

薩摩国府……塔之原……蒲生……鍋倉……木田……高井田……内……大隅国府
新田八幡 若宮八幡 正八幡若宮 新正八幡 弓箭八幡 高倉八幡 大隅正八幡 府中

《大隅国＝日向国・肥後国を結ぶ道》



《薩摩国＝肥後国を結ぶ道》



八幡社の分布を調べることは、八幡社を直接結ぶという意味ではない。所在する郷や村の中に残っている道を古道として見直すことである。なお鹿児島県内の八幡社についてはリスト＝アップしてあるが、ページ数の都合上、割愛する。

（３）「大人足」地名の分布から考える —— 歴史地理学的方法（その２）

平成14年正月、前述した木下良古代交通研究会長からの年賀状に「大人足」地名のことが記されていた。「30年前の調査で肥後国の駅想定地に大人足地名があることを知りましたが、意味は判りませんでした。昨年、木本雅康君（前述）が古代駅制と巨人伝説の関係を雑誌『本郷』に書きました。……駅路の大規模な切通しを巨人の足跡と見たようです」と。その返事に地名カードに記録してあった県内の「大人足」地名を眺めると、すべての道路と結びつくと回答した。

（大隅国）

1. 大人形——牧園町下中津川
2. 大人形——横川町上ノ
3. 大広形——菱刈町徳辺
4. 大人足形——福山町佳例川
5. 人足形——垂水市牛根境
6. 大 人——末吉町二之方
7. 大人足——志布志町安楽

（薩摩国）

8. 大人足——出水市武本
9. 大 人——野田町下名
10. 大 人——阿久根市大川
11. 大人跡——串木野市下名
12. 定之足形——川辺町野間
13. 大広形——鹿児島市犬迫
14. 大人足形——鹿児島市川上

これらのうち、1・2・3は大隅国＝肥後国を結ぶ駅路と、8・9・10は薩摩国＝肥後国とを結ぶ駅路（もしくは伝路）との関連が考えられる。民俗学の対象であった巨人伝説地名が、古道を探す歴史地理学的な視点で注目されることになった。

（４）交通要衝の立地から考える —— 歴史地理学的方法（その３）

鹿児島県96市町村の立地を見ると、2／3が海岸線をもっている。今までは陸上交通のみにとらわれていた嫌いがある。海上交通を重視すると違った視点が生まれて来る。県内の主な市・町は、ほとんどが水陸交通の要衝に位置している。その視点に立つと、古道・駅家を探すには水陸交通の要衝に目を配る必要がある。以下、目配りの要項を箇条書きにしてみる。

1. 港町として栄えた——大隅国・薩摩国の場合はほとんどが河口港であった。
2. 河川の分岐点（本流・支流の合流点）——近くに中世の山城が築かれている例が多い。
3. 豊富な清水——沿岸航路の場合は泊地で飲料水を得ることが出来るが、外洋航海となると飲料水の確保は必須条件となる。陸路の場合でも清水・泉の存在は無視出来ない。

4. 渡河地点の確認——昔の渡河地点は限定された。随所に渡し船があったのではない。

5. 峠に連なる道——国境を越える道は、大隅国＝日向国を除けばほぼ決まっている。

大隅国＝薩摩国の駅路——新留峠を越えたと考えられる。

大隅国＝肥後国の駅路——亀嶺峠を越えて水俣・佐敷に出た。加久藤峠を越えて人吉に出るルートは日向国真幸駅を経由しなければならない。

薩摩国＝肥後国の駅路——海岸沿いの道に峠はない。但し、バイパスの場合、川内・出水の間には横座峠、出水・水俣の間に芭蕉越があった。

大隅国＝日向国への道——いろいろなルートが考えられる。

①国分……敷根……福山……亀割峠……牧之原……都城（島津駅）

②国分……敷根……門倉薬師……上之段……牧之原……都城——（上井覚兼日記）

③国分……止上……財部……都城——（長門本平家物語）

④国分（浜之市）……松永……大窪……日向国高原——（西藩野史）

⑤国分……溝辺……横川……栗野……吉松……日向国真幸

⑥国分……松永……牧園……栗野……吉松……日向国真幸

⑦国分（浜之市）……（途中不詳）……栗野……日向国白鳥岳

①近世の高岡筋（日向街道）、②中世の日州通道、③俊寛配流の道、④島津義弘の関ヶ原から帰還の道、⑤天降川右岸を北上する道：宇佐八幡の密使が大隅正八幡を焼き払い、討たれたとの伝説（十三塚）が溝辺にある、⑥天降川左岸を北上する道：松永に「古道」の地名がある、⑦元禄時代に東大寺再建用の材木を運び出した道。その他にも二・三あるが駅路・伝路とは結び付かないので省略する。

航空写真を利用する方法もよく言われるが、慣れないと難しい。立体鏡を購入して試みるが持てあましている。本稿では触れない。研究者が上空から観察できると違う視点も出て来るだろう。

（5）墨書土器・蔵骨器の出土分布から考える —— 歴史考古学的方法（その1）

上記（2）～（4）で述べたルートについて機会があるたびにトレンチによる確認調査を実施し、消去法でしぼっていけば、おのずから結論を見いだせるであろう。他県では墨書土器の出土例が多いので、考察のてがかりとはなりにくいだろうが、鹿児島県の場合、墨書土器・蔵骨器などの出土分布は官衙・官道の存在と結び付いている。参考文献名⁹⁾をあげておくのでそれに依られたい。

（6）地割の方位・直線的道路に留意する —— 歴史考古学的方法（その2）

奈良・平安時代の建物や地割の方位には真北すなわち北極星を見通した方向をよく用いていた。このことは薩摩国府・国分寺、大隅国府・国分寺の地割にも用いられていた。真北の方位は鹿児島県の場合は磁北から西に5度乃至6度振っている。すなわちN 5° E～N 6° Eの範囲とみられる。5万分之1図や2万5千分之1図に「6° 西偏している」などと注記されている。鹿児島市の場合は現在は「6° 西に振る」とあるが、昭和40年代の地形図では「5° 20′ の偏り」となっている。時期的に若干のずれがあるのであろう。クリノメーターで方位を見る時は5度と6度を厳密に見分けることは困難であり、おおよその数値で判断せざるを得ない。

西出水小学校脇の道を正午すぎに歩いていた時、自分の影が道路と併行しているのに気付いた。何気なく顔をあげて道路の延長を見やると、鳥居が見える。足を伸ばして行くと、箱崎八幡（出水

郷の総廟)だった。しかもその道路は直線的な道。後日、クリノメーターで測ると大体N5°E、真北の道路と知った。その道路を反対方向に南に約3km行くと、道から少し降りた平良川の岸に小字「市来・上市来」がある。市来駅の有力比定地とのことで、出水市教育委員会によって発掘調査もなされた。発掘現場を見学したが、氾濫原に営まれた水田の中であり駅家跡に結び付くのかと、首をひねらざるを得なかった。その道路の延長は横座峠を越えて、後の高城麓や薩摩国府に向かう道である。仮に駅路とすると英祢駅を通らない道になる。但し、高城麓に高来駅があったと仮定すると意味もある道になる(近世では高尾野往還と呼ばれる道で伊能地図にも記載がある)。またその南北路とほぼ直交して出水高校の前を東西に走る直線的な道路は近世の出水筋(薩摩街道)であった。昭和10年代までは松並木が残っていたという。

西出水小学校一帯の小字は「政所(マドコロ)」。政所に隣接して小字堀ノ内(出水工業高校敷地)小字関屋町(出水高校敷地)がある。この一帯に出水郡家を求めるべきと考える¹⁰⁾。

古代の官道は数多くの調査例から直線的である場合が多い。直線的な道路が真北の方向にもとづくものであったり、少しずれて春分の「日の出」の方向であることに気付けば、古道とみなしてよいだろう。

3 大隅国・薩摩国の駅家追求の問題点

従来、延喜式記載の駅名の順序が「市来」から始まっているために出水市内に求めなければならないとの先入観に支配されて来た。市来駅を先頭に考える論者たちが末尾に記されている高来駅の位置を考慮に入れないのは不思議な話である。字義通りの地名を考えると、高城郡家の地が最有力候補となり、網津駅と田後駅の間に求めるのが筋だと考える。また駅家所在地が水陸交通の要地であったと仮定すると、中世・近世を通じて水陸交通の要地であった市来院の地に市来駅を求めるのは自然の推理でもある。薩摩国の入口にあった出水郡家の地が駅名記載にもれていたと考えてよいと思う。市来駅出水市内説を打破するためには、諸国の駅家比定地で小字名をもって駅家に当てる例がどれほどあるかをチェックする必要がある。

大水駅・高来駅の所在地をはじめ、大隅国・薩摩国の官道は難問の山積みが現実である。この一文が解決の突破口となれば望外の喜びである。

【 註 】

- 1～3 『薩摩国府跡・国分寺跡』 鹿児島県教育委員会 1975
- 4 『大隅国分寺跡』 国分市埋蔵文化財発掘調査報告書(7) 国分市教育委員会 2002
- 5 『宮田ヶ岡窯跡』 始良町埋蔵文化財発掘調査報告書(7) 始良町教育委員会 1999
- 6 『歴史の道調査報告』第2集「大口筋・加久藤筋・日向筋」 鹿児島県教育委員会 1994
- 7 『市来遺跡・老神遺跡』 出水市埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 出水市教育委員会 1995
- 8 小園公雄 「大隅国府と日向国島津駅との古代官道について」『鹿大史学』第39号 1991
- 9 池畑耕一 「文字資料土器と蔵骨器の出土分布」『南端の文字文化』 1996 所収
平田信芳 『地名が語る鹿児島島の歴史』 春苑堂出版 1997 p78に上記分布図を引用
- 10 平田信芳 ibid. p124-p128 「出水郡家と市来駅の問題」